# 松江市御崎山古墳出土獅噛環頭大刀について

吉　松　優　希

## はじめに

御崎山古墳は松江市大草町に所在する全長40mの前方後方墳である。1970年に島根県史跡に指定されて、1972～1973年にかけて発掘調査が行われている。詳細は報告書として刊行されているが（大谷編1996）、大小２つの家形石棺を内包する割石積みの横穴式石室を埋葬施設とし、獅噛環頭大刀や鉄刀、金銅装馬具、鉄鏃、靭金具、須恵器などの副葬品が出土している。築造時期は出雲３期とされ、出雲東部の山代・大庭古墳群の最高首長層を補佐する地位と位置づけられている。

御崎山古墳から出土した獅噛環頭大刀は、列島唯一の舌出し獣面で、柄間は薄銀板に龍文を表現した非常に特異なものである。今回、本資料についてX線CTを撮影する機会を得たので、その成果をもとに構造的な特徴を整理したい。また、改めて出雲東部の装飾付大刀の状況などについても整理してみたい。

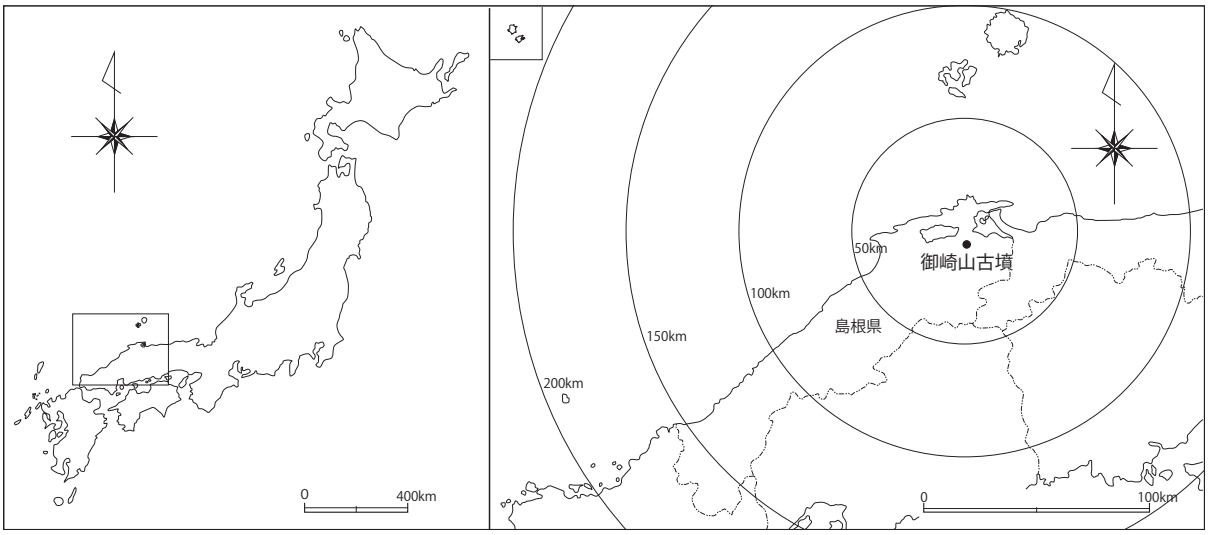
## １　御崎山古墳出土獅噛環頭大刀のX線CT調査

2022年７月26～28日にかけて、九州歴史資料館の協力のもと、御崎山古墳出土獅噛環頭大刀のX線CT調査を行った。X線CT調査や観察の成果をもとに、基本的な情報や構造について整理したい。

### （１）柄　頭

中心飾りは獣面で、舌を出すことが大きな特徴である。環部には走龍文が描かれる。環部走龍文は「表裏分離の喰合型」に位置づけられる（大谷2016）。中心飾り、環部ともに鍍金が施される。

X線CT調査によると中心飾り内部まで達する別材の環頭茎が挿入されていることがわかる。獅噛環頭大刀の柄頭には鉄製の茎が挿入されている事例がある（穴沢・馬目1979・1987）。御崎山古墳出土獅噛環頭大刀の場合は中心飾りまで達する環頭茎（鉄製か）という点が大きな特徴である。鋳造時に鋳型に茎を挿入した状態で鋳包んでいるものと考えられる。X線CT画像からは、環頭茎は長さ6.0㎝程度と考えられる。側面からのX線CT画像では透過の関係や環部・中心飾りの厚さから、厚みなどの形状は不明である。この構造的な特徴は安来市鷺の湯




第１図　御崎山古墳の位置

病院跡横穴出土単鳳環頭大刀にもみられる特徴である。この知見は、現在、東北大学と島根大学で2018年度から実施している共同研究（鷺の湯病院跡横穴プロジェクト）の調査の一環として2019年に東北大学総合学術博物館で実施したX線CT調査の成果によるもので、研究メンバーでこの情報は共有されている[(1)]。今回、鋳包みを確認できたのは、先に共同研究での鷺の湯病院跡横穴出土単鳳環頭大刀のX線CT調査の成果があったからであることを付しておく。環頭茎には目釘がみられる。

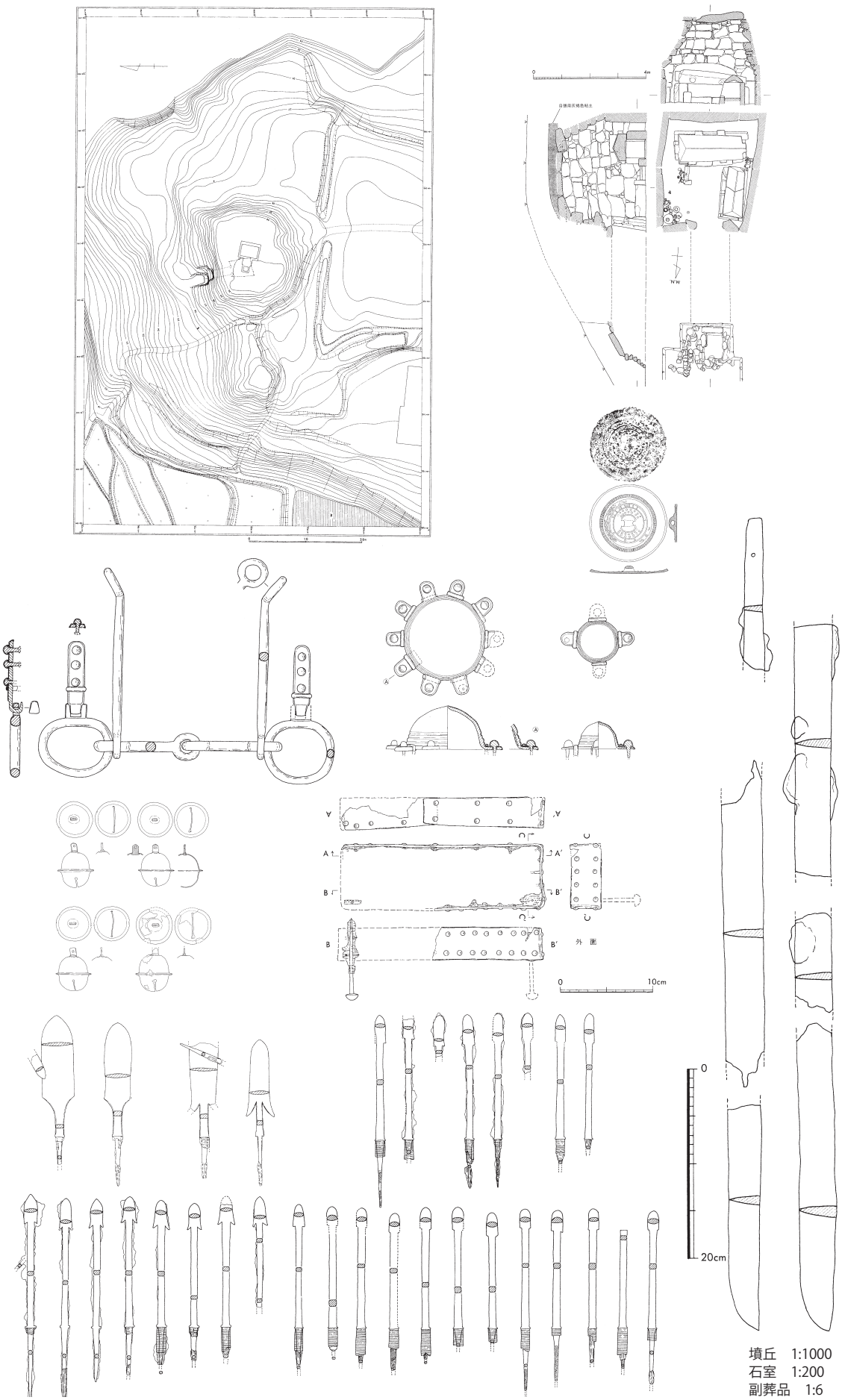
### （２）柄の構造

柄は柄頭筒金具、柄間、鏇がある。柄頭筒金具は金銅製である。柄頭筒金具は断面倒卵形で、端部を丸めて玉縁を作り出している。長径3.4㎝、短径2.7㎝である。環頭側の小口面は薄い銀板で塞がれている。柄頭とは環頭茎の目釘で接続される。

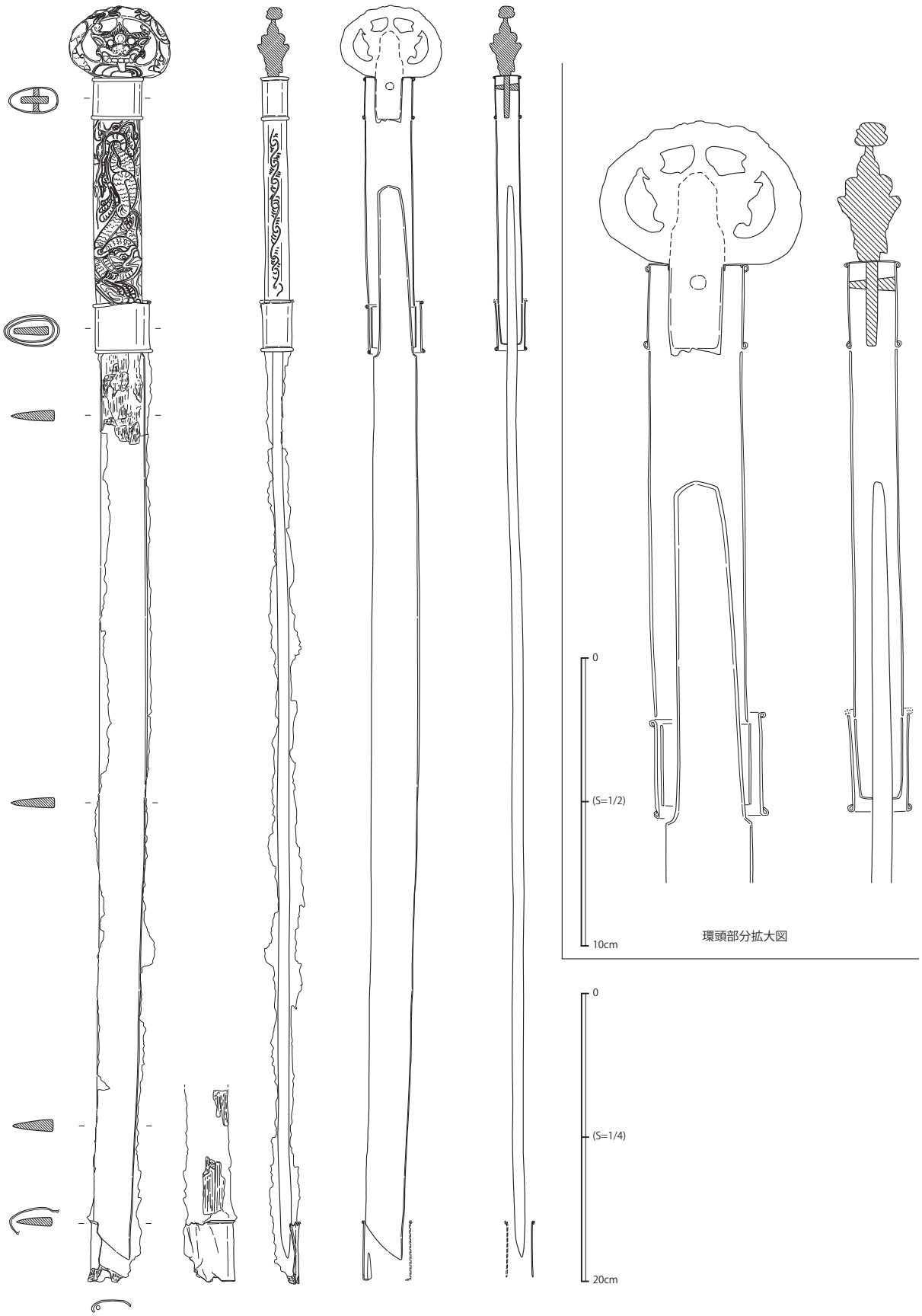
柄間は、柄木に龍文を彫り込み、１枚の銀板で包み込み、文様を浮き出させている（町田1976）。柄間の銀板は鋲などで固定はされておらず、刃側の合わせ目の中に折り込んで留められている。背側の銀板は鞘口金具の内部まで達している。

1.(県)御崎山古墳　2.(国)出雲国府跡　3.才光寺古墳群　4.(県)西百塚山古墳群　5.(県)東百塚山古墳群　6.(県)古天神古墳　7.(県)大草岩船古墳　8.(国)安部谷古墳
9.湯田横穴墓群　10.湯谷横穴墓群　11.大円寺上古墳群　12.大谷横穴墓群　13.上竹矢古墳群　14.廻田古墳群　15.小谷横穴墓群　16.(県)岩屋後古墳
17.(国)岡田山古墳　18.大石古墳群　19.大石横穴墓群　20.平古墳群　21.東淵寺古墳　22.向山１号墳　23.(国)大庭鶏塚古墳　24.(国)山代二子塚古墳　25.(国)山代方墳
26.山代原古墳(永久宅後古墳)　27.狐谷古墳･横穴墓群　28.井出平山古墳群　29.(県)十王免横穴墓群　30.南外古墳群　31.東光台古墳　32.(国)石屋古墳　33.荒神畑古墳
34.井ノ奥1号墳　35.井ノ奥4号墳　36.手間古墳　37.竹矢岩舟古墳　38.才ノ峠遺跡　39.灘山古墳　40.観音寺古墳群　41.中竹矢遺跡　42.大木権現山古墳群　43.島田遺跡
44.寺床遺跡　45.島田池遺跡　46.古城山遺跡　47.古城山古墳群　48.古城山横穴墓群　49.鳥越古墳　50.姫津遺跡　51.姫津古墳群　52.姫津谷横穴墓群
53.三反田A古墳群　54.神子谷古墳　55.天王横穴　56.魚見塚古墳　57.朝酌岩屋古墳　58.朝酌小学校前古墳　59.朝酌小学校校庭古墳　60.廻原1号墳　61.観音山2号墳
62.観音山1号墳　63.廟所古墳　64.イガラビ古墳群　65.後平横穴墓群　66.山巻古墳

**第２図　御崎山古墳と周辺の古墳位置図（S=1/50,000）**




第 3 図　御崎山古墳墳丘測量図・石室測量図・主要出土遺物




第４図　御崎山古墳出土獅噛環頭大刀実測図（S=1/4）

鋒は鞘口金具内にあり、肉眼では観察できないが、X線CT画像で明瞭に観察することができる。長径3.2㎝、短径2.5㎝である。鋒には切先側に堰板があることがわかる。断面は倒卵形で鋒も金銅製であろう。鐔はない呑口式である。

### （3）鞘の構造

鞘金具としては、鞘口金具と鞘尻金具がある。いずれも金銅製である。鞘口金具は断面倒卵形で、端部を丸めて玉縁を作り出している。長径3.9㎝、短径2.2㎝である。

鞘尻金具は、佩表側が欠損している。柄頭端部には玉縁の一部が残存している。X線CTによると玉縁は金銅板の端部を丸めて玉縁を作り出している。刃部側には蟹目釘の脱落痕跡がみられる。背側には蟹目釘の脱落痕跡はみられないが、あった場合は刀身切先に接触するものと考えられる（大谷2016）。鞘尻部分での長径3.2㎝、短径1.5㎝である。

### （4）刀　身

刀身は柄間や鞘口金具、鞘尻金具が装着する部分は直接観察することはできない。刀身には木質が一部付着している。金銅装の装具などが装着されていた痕跡は現状の表面観察では確認できない[(2)]。X線CTによると、茎尻の形態は栗尻で、茎の目釘などは判然とせず、柄木と刀身の装着方法は不明である。関は不均等両関で、刃部側がやや緩く、茎尻に向かってややカーブしている。報告書ではフクラ状を呈すると報告されているが、X線CT画像からは、切先はカマス状を呈しているように観察できるが、判然としない。全長74㎝、幅3.0㎝で、背幅0.7㎝である。

### （5）小　結

ここまで御崎山古墳出土獅噛環頭大刀の構造的な特徴について述べた。改めて整理しておくと、今回のX線CT調査で判明した構造的な特徴は以下のとおり。

① 柄頭中心飾り内部まで達する別材（鉄製か）を挿入、鋳包みを行っている。
② 柄頭筒金具の柄頭側に薄銀板の蓋をし、端部を筒金具内に折り込んでいる。
③ 鞘尻金具内刃部側に蟹目釘の脱落痕跡がみられる。
④ 茎の刃部側が関から茎尻にむかってややカーブしている。

以上の４点が今回のX線CT調査の大きな成果である。これらの成果のうち、①の柄頭にかかわる構造的な特徴については非常に重要な点である。確認されている類例も少なく、製作技法だけでなく、製作地の問題とも大きく関係する可能性がある。

## 2　御崎山古墳出土獅噛環頭大刀の位置づけ

獅噛環頭大刀については、すでにいくつかの先学の検討成果があり（穴沢・馬目1979・1987、小谷地2000、大谷2018b）、それをもとに構造的な特徴等を踏まえ、御崎山古墳出土獅噛環頭大刀の位置づけについて整理したい。

### （1）年代的な位置

年代的な位置付けについては、穴沢・馬目氏、小谷地氏、大谷氏とそれぞれの検討の成果がある（穴沢・馬目1979・1987、小谷地2000、大谷2018b）。穴沢・馬目氏は柄頭をA群～D群に分類し、前後関係などを整理する（穴沢・馬目1979・1987）。小谷地氏は柄頭の分類を行い、それぞれの系列相互の併行関係を整理し、第一～第五段階を設定している（小谷地2000）。大谷氏は装具の特徴なども踏まえて、１～４段階を設定する。これらの分

類、年代的な位置付けのうえで共通しているのは、いずれも6世紀後半[3]に位置づけられる点である。この点は出土した須恵器（出雲3期）の年代とも齟齬はなく、年代的な位置はこれまでの指摘どおりである。

### （2）系　譜

これまで獅噛環頭大刀については、その起源は中国に求められ、百済からもたらされた（穴沢・馬目1979、大谷2018）とする説が有力である。筆者はその系譜や起源について否定する材料を持ち合わせていないが、ここでは御崎山古墳出土獅噛環頭大刀の構造、拵えに改めて注目しておきたい。

構造の面で注目されるのは、柄頭中心飾り内部まで達する別材（鉄製か）を挿入、鋳包みを行っている点である。獅噛環頭大刀は青銅地の環に溝を設け、鉄製の環頭茎をはめ込んでいるものが多い（穴沢・馬目1979）。このような構造をとるものには、一部の旋回式単龍環頭大刀にみられる（金2019）[4]。これらの旋回式単龍環頭大刀は環に穴を設けて別づくりの茎を挿入する点で一般的な単龍・単鳳環頭大刀とは製作方法が異なり、古相資料は舶載品とみなす見解が示され、特に百済からもたらされた可能性が指摘されている（金2019）[5]。この構造的な特徴は環頭茎に別材を用いるという点で御崎山古墳出土獅噛環頭大刀との共通点であり、その系譜を考える上で重要であると考える。

拵えに注目すると、大きな特徴としては、柄間に龍文を描いた銀板が巻かれている点があげられる。類似する拵えを持つのが、韓国羅州伏岩里3号墳出土獅噛環頭大刀である。大谷氏の整理によると①鐔のない呑口式の拵えで、②柄間に銀板を巻き文様を描いている点で共通する一方で、いくつかの差異を指摘している（大谷2016）。差異としては③龍文の図柄が佩表・裏で異なること、④文様の鱗の描き方、⑤中心飾りが環部に食らいつく意匠であること、⑥環頭茎と刀身茎が鋲で直接留められること、⑦円環の佩用金具があること、である。これらの差異から御崎山古墳出土獅噛環頭大刀が羅州伏岩里3号墳出土獅噛環頭大刀に先行し、有鐔式の獅噛環頭大刀へ変遷する流れを想定する。

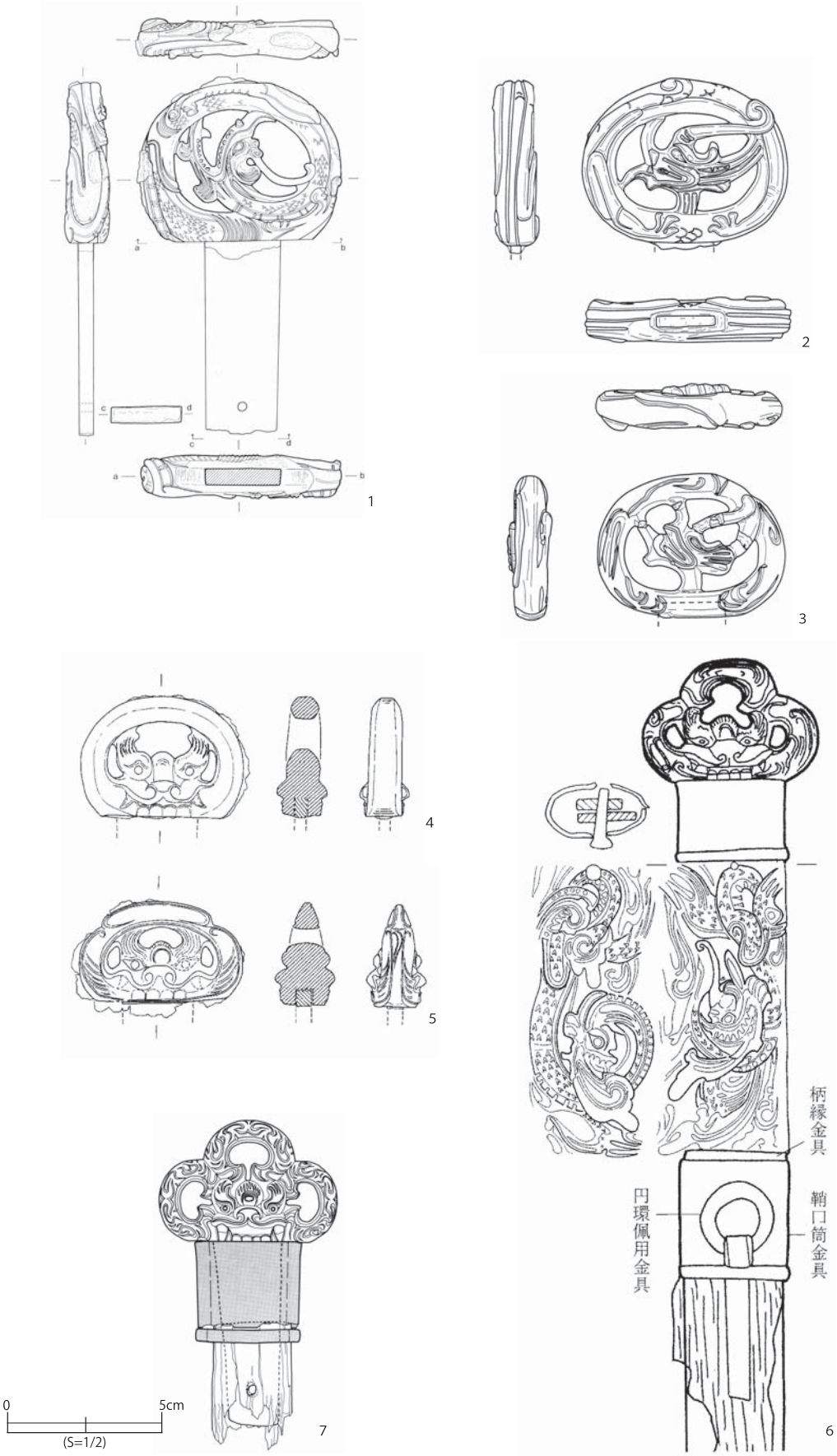
この羅州伏岩里3号墳出土獅噛環頭大刀に類似する環頭大刀が青森県八戸市丹後平15号墳から出土しており、三累環の内部に獅噛文の中心飾りをもつ。この獅噛三累環頭大刀は各種の分析がなされており、X線CTの成果から、一体で鋳造されたことがわかる（赤沼2018）。また蛍光X線分析からは、柄頭が黄銅（真鍮）製であることも判明しており[6]、構造やその製作技法も判明している資料である。羅州伏岩里3号墳との類似性からやはり百済からの舶載品と指摘される（大谷2018）。

これらを整理しておくと、一部の旋回式単龍環頭大刀と環頭茎に別材を用いる点で共通点を見出すことができる。また特徴的な柄間の拵えに類似する資料が羅州伏岩里3号墳にみられる。いずれも系譜は百済にもとめられることから、御崎山古墳出土獅噛環頭大刀はこれまでの指摘どおり、やはり百済からの舶載品と考えるのが妥当であろう[7]。

## 3　出雲東部における装飾付大刀

次に御崎山古墳出土獅噛環頭大刀から派生する問題として、出雲東部における装飾付大刀について検討したい。この問題については、すでに別稿で整理をしているところである（吉松2022）が、非常に重要な問題であると考えるため、改めて論じておきたい。

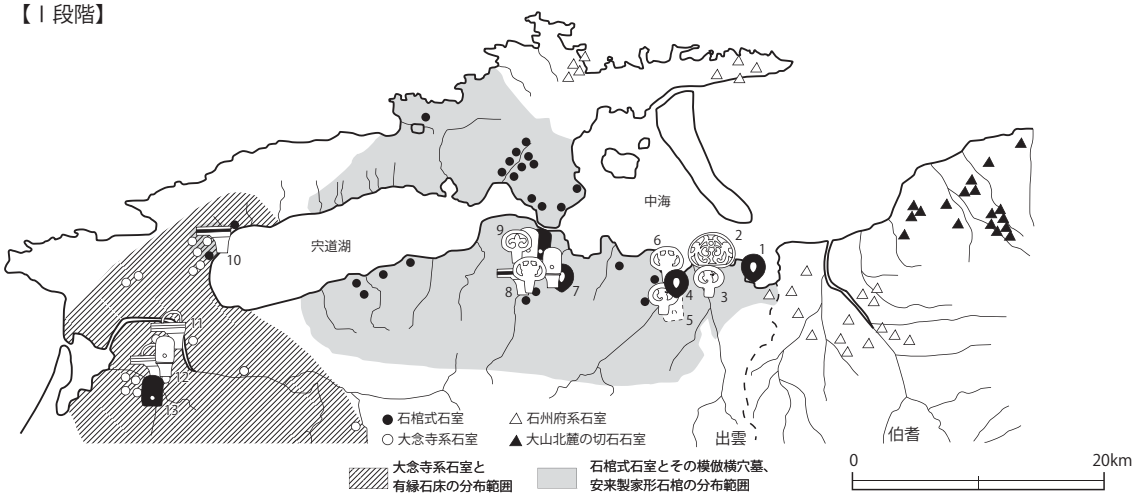
これまで出雲の東西においては、石室形態や墳形、古墳祭祀が異なることが知られている。装飾付大刀の分布も東西で差異があることが大谷晃二氏によって指摘されている（大谷1997・1999）。Ⅰ段階（出雲3期・TK43型式期）における出雲東西での異なる形式の装飾付大刀の分布とⅡ段階（出雲4期・TK209型式期）における装飾付大刀分布の偏在性は解消である。その後、松尾充晶氏は大谷氏の指摘を深化させ、Ⅰ段階における龍鳳系環頭大刀が安来平野に分布することから舎人もしくはそれに類似する職掌を与えられた人物であると想定する（松尾




1～3旋回式単龍環頭大刀（1金鈴塚古墳（古相）　2田渡（古相）　3亀山古墳群（新相））
4・5獅噛環頭大刀（鶴巻塚古墳）　6・7獅噛三累環頭大刀（6羅州伏岩里3号墳　7丹後平15号墳）

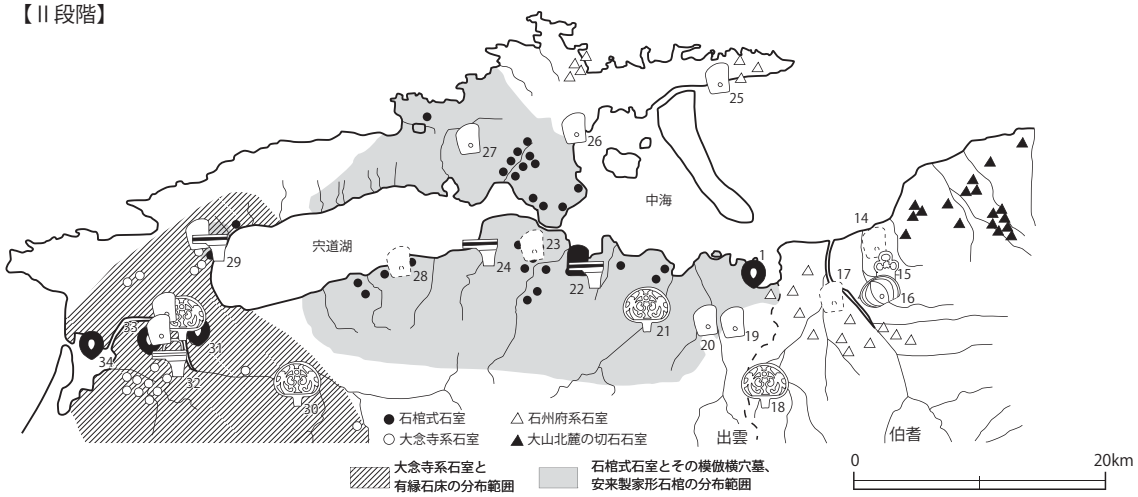
**第5図　旋回式単龍環頭大刀と獅噛環頭大刀・獅噛三累環頭大刀の類例（S=1/2）**

【Ⅰ段階】



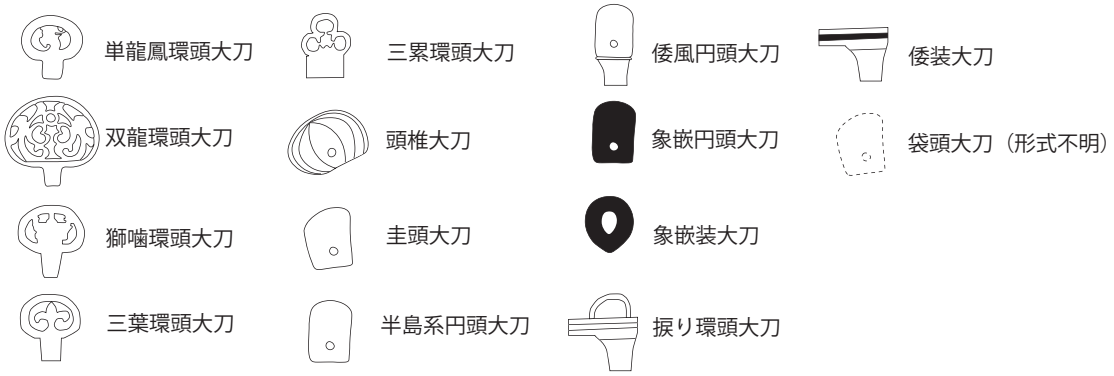

1 小汐手横穴墓群　2 高広Ⅳ区１号横穴墓　3 臼コクリ S-２号横穴墓　4 宮内Ⅱ区１号横穴墓　5 鷺の湯病院跡横穴墓　6 仏山古墳
7 古天神古墳　8 御崎山古墳　9 岡田山１号墳　10 上島古墳　11 大念寺古墳　12 上塩冶築山古墳　13 妙蓮寺山古墳

【Ⅱ段階】

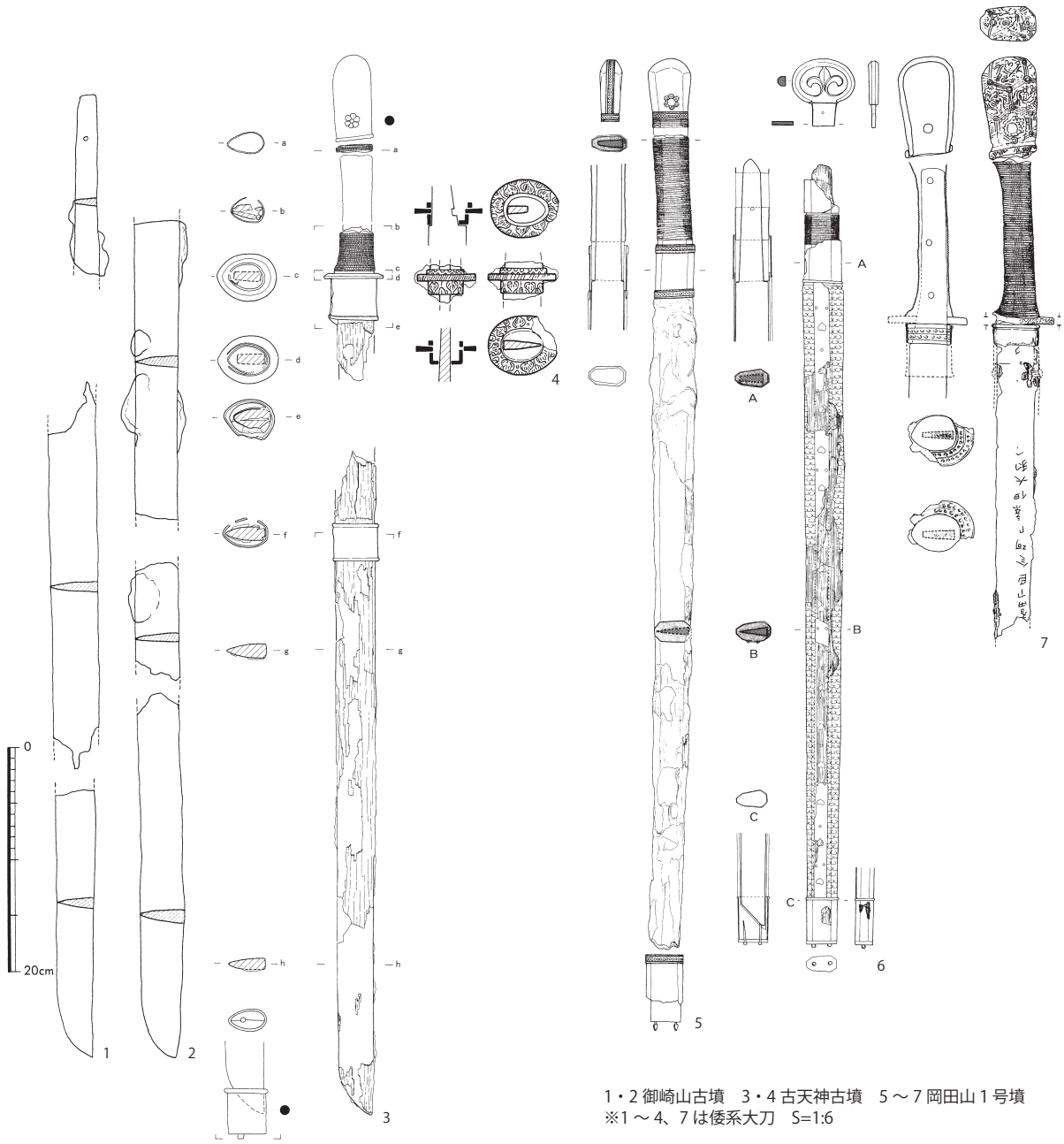



14 大転場 29 号墳　15 岡成の古墳　16 石州府１号墳　17 二子塚古墳　18 武信の古墳　19 中山横穴墓　20 鳥木横穴墓　21 かわらけ谷横穴墓
22 島田池１区２号横穴墓　23 向山１号墳　24 奥山遺跡 B-Ⅱ号横穴墓　25 福浦法田峠２号墳　26 連行１号横穴墓　27 高田尾横穴墓
28 松石横穴墓　29 中村１号墳　30 三代古墳　31 上塩冶横穴墓群　32 築山３号墳　33 放レ山古墳　34 神門第 10 支群 H-４号横穴墓

【凡例】




**第６図　出雲地域の装飾付大刀分布**



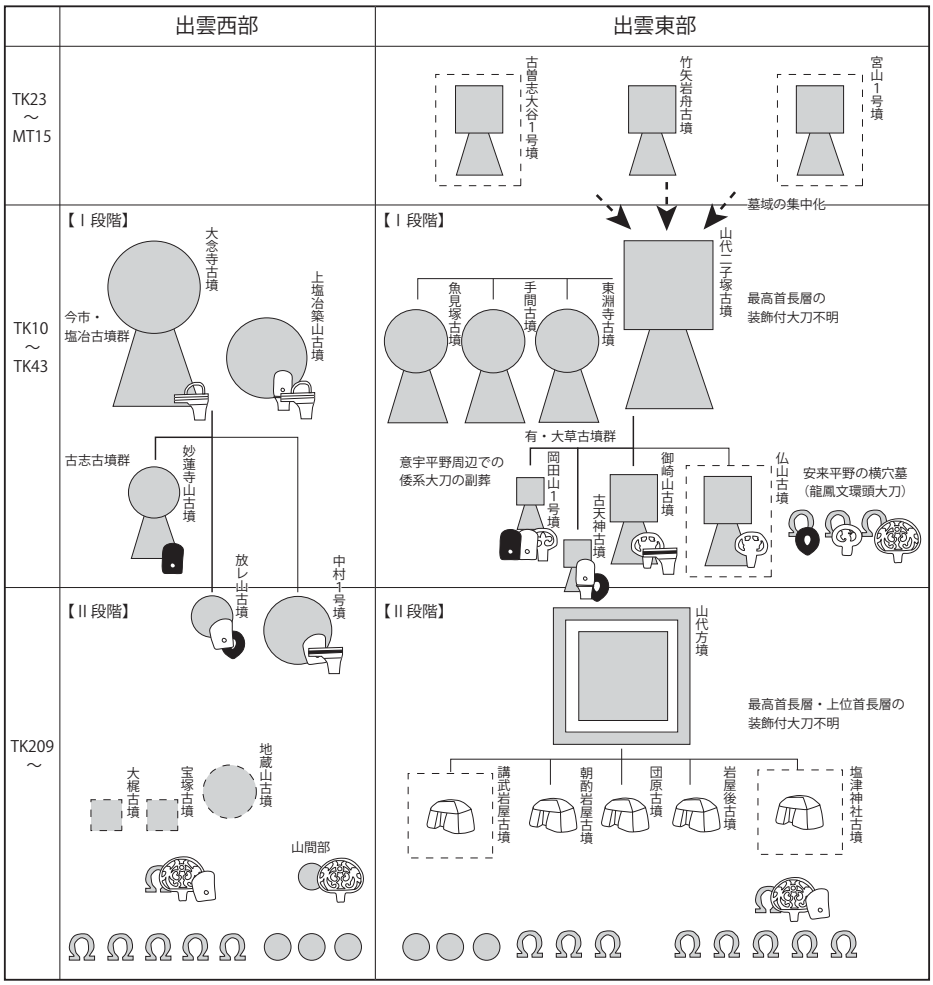

**第７図　意宇平野の主要装飾付大刀（S=1/6）**

2001)。また、Ⅱ段階に、島根半島では圭頭大刀が目立つことを指摘している（松尾2005)。実際に近年の発掘調査によって、島根半島で圭頭大刀の出土事例が増加し、松尾氏の指摘を補完する（川西2018)。また、島根半島における圭頭大刀の分布については、伯耆西部との関係でとらえられ、米子市石州府１号墳の支配領域（石州府系石室の分布範囲）に倭製金銀装頭椎大刀・圭頭大刀が配布されていることが指摘されている（大谷2020)。

これまでⅠ段階における装飾付大刀の分布の偏在性が注目されてきた。ここでは先の指摘にもとづいて[8]、改めて装飾付大刀から東西出雲の状況を整理してみたい。

### （１）Ⅰ段階

これまでの指摘どおり、出雲東部と西部では装飾付大刀の偏在的な分布状況がある。出雲東部では半島系環頭




**第８図　東西出雲の階層構造と大刀保有**

大刀が中心に分布し、西部では倭系大刀が分布し、半島系環頭大刀の出土は全くない（大谷1999）。その傾向は現状も変わらないが、出雲東部の状況は今一度整理しておきたい。

出雲東部では、安来平野と意宇平野に装飾付大刀の分布の中心がある。安来平野では、単龍・単鳳環頭大刀などの環頭大刀や象嵌装大刀が横穴墓を中心に副葬される。意宇平野では半島系環頭大刀が分布する一方で、岡田山１号墳で額田部臣銘文入象嵌円頭大刀、古天神古墳で銀装円頭大刀[9]、御崎山古墳でも刃部幅４㎝超で全長１ｍを超える可能性のある鉄刀２振が出土している。御崎山古墳の鉄刀は茎尻が一文字尻であることから２d式に位置づけられ、これらの大刀群は６世紀の倭系装飾付大刀に採用されることが知られている（齊藤2017b）[10]。岡田山１号墳、古天神古墳、御崎山古墳から出土したこれらの大刀は、いずれも倭系大刀である。安来平野には倭系大刀の出土は現状確認できず、Ⅰ段階において出雲東部の中枢である意宇平野に限って分布するようである。

### （２）Ⅱ段階

出雲東部、西部ともに装飾付大刀佩用者層が拡大する。その結果を示すとおり、装飾付大刀の分布がⅠ段階にみられなかった山間部にも拡大し、階層的にも横穴墓被葬者に副葬される例が増加する。また、Ⅰ段階にみられた大刀の偏在的な分布も解消され、両地域で圭頭大刀や双龍環頭大刀など、同様の大刀がみられるようになる。しかし、いずれの地域でも最高首長層の装飾付大刀は不明である。

一方でⅠ段階にはみられなかった伯耆西部、島根半島を中心とした石州府系石室の分布範囲に、倭製金銀装頭椎大刀・圭頭大刀が分布するようになる（大谷2020）。

### （3）小　結

以上、大まかにⅠ段階、Ⅱ段階の状況を改めて整理した。出雲西部の状況はこれまでと大きく変わらない。しかし、出雲東部の状況はこれまで指摘されている部分もあるが、Ⅰ段階における意宇平野での倭系大刀の分布は非常に重要な視点であると考える。

Ⅰ段階に意宇平野で出土する倭系大刀の中でも岡田山１号墳出土額田部臣銘文入象嵌円頭大刀や古天神古墳出土銀装円頭大刀は、上塩冶築山古墳出土金銀装円頭大刀の位置づけられる倭風円頭大刀Ⅰ系列と親縁性が高いことが指摘されている（大谷2018）。これまで大刀の偏在性が注目されてきたが、出雲の東西で同系列、またはそれに近い大刀が副葬されている点は注目される。また、御崎山古墳でも刃部幅４㎝超で全長１ｍを超える倭系大刀の存在があり、出雲東部の中枢に位置する古墳に倭系大刀が半島系環頭大刀などとともに副葬されている点は重要である。

これまで装飾付大刀からみた東西出雲論は大刀の偏在的な分布が強調されてきた。しかし、先に指摘したとおり、Ⅰ段階における出雲東部（意宇平野）での倭系大刀の分布の状況などが改めて明らかになった。このことは東西出雲を考える上では重要な視点であろう。倭系大刀の親縁性を認める一方で、偏在的な大刀分布を示す状況の背景（階層・職掌など）にあるものは今後も検討の余地があろう。また、岩本崇氏は近年の研究動向などから「東西出雲論」を今日的に再構築する必要性を説いている（岩本2022）。石室や埴輪にみられる東西の連携などが指摘されているところである。東西で倭系大刀がみられる点は連携と簡単に表現するのは躊躇される[11]が、東西のそれぞれに倭系大刀が分布すること、東部では半島系環頭大刀と共伴することなどからは、与えられた役割や職掌が東部と西部で共通の部分もありながら、異なっていた部分もあったとみることができるかもしれない。

## おわりに

これまで御崎山古墳出土獅噛環頭大刀のＸ線CT調査の成果を整理し、その構造的な特徴を紹介したほか、位置づけについて整理した。今回のＸ線CT調査の成果で判明したもっとも大きな構造的な特徴としては、環頭茎が環部の内部に挿入し鋳包みを行っていることである。このような構造をとるのは安来市鷺の湯病院跡横穴出土単鳳環頭大刀があるのみで類例は非常に少ない。獅噛環頭大刀などでは環部に穴を設け、環頭茎を挿入しているものがある。このような構造は一部の単龍環頭大刀を除いて、他にはみられない構造である。このような構造をとるものの類例を検討することで系譜などの議論にも進展があるものと考える。現状では、拵えなどの特徴や特殊な柄頭構造から、御崎山古墳出土獅噛環頭大刀は舶載品と考えるのが妥当であろう。

また、御崎山古墳出土獅噛環頭大刀から派生する問題として、東西出雲の装飾付大刀分布についても検討した。

重要な点として、Ⅰ段階における出雲東部、意宇平野における倭系大刀の分布である。これまで半島系環頭大刀が出雲東部には分布し、出雲西部の倭系大刀と排他的な関係で分布している状況が注目されてきた。しかし、出雲東部、特に中枢ともいえる意宇平野において半島系環頭大刀と共伴して倭系大刀が出土している。このような状況をどう捉えるか、いわゆる「東西出雲論」にかかわることとして、これらは様々な要素も含めたうえでの検討が必要であろう。

本稿を成すにあたり、Ｘ線CT調査では九州歴史資料館と小林啓氏、加藤和歳氏、木林俊英氏、澤田正明氏に大変お世話になりました。また、現在進行中の鷺の湯病院跡横穴プロジェクトの研究成果を一部公表することを許可いただいた藤澤敦氏、岩本崇氏、鷺の湯病院跡横穴プロジェクトの研究メンバーに感謝いたします。大谷晃

二氏には様々な資料の提供と助言をいただくとともに、下記の諸氏・機関にご協力いただいた。記して感謝申し上げます。なお、本稿は14県連携共同調査研究「古墳時代の刀剣類」の成果である。

岩本　崇、岩本真実、石橋　宏、大谷晃二、加藤和歳、鹿納晴尚、鹿又喜隆、金　宇大、木林俊英、小林啓、齊藤大輔、澤田正明、土屋隆史、花谷　浩、藤澤　敦、九州歴史資料館、島根県立八雲立つ風土記の丘

## 註

（1）この共同研究は島根大学法文学部山陰研究センターの山陰研究プロジェクト1602「山陰地方における既発掘考古資料の再検討による歴史文化遺産の活用と地域還元」、1901「既掘考古資料の集成検討および一括資料群の再検討による山陰地域社会の動態的研究」、2202「既掘考古資料の集成検討および一括資料群の再検討による山陰地域社会の動態的研究」により、実施されている。鷺の湯病院跡横穴プロジェクトのメンバーは以下のとおり。岩本崇、大谷晃二、花谷浩、金宇大、土屋隆史、藤澤敦、鹿又喜隆、石橋宏、鹿納春尚、筆者。

（2）報告書の中でも、出土状況の所見から鞘には金銅板などでの加飾はなかったものと理解されている（大谷編1996）。

（3）獣面を検討した山本忠尚氏は獣面の形式から、6世紀初頭まで製作年代が遡る可能性を指摘している（山本1979）。

（4）このほか環に穴を設け、茎を挿入する構造をとるものとして三累環頭大刀がある（金2021）。三累環頭大刀の場合は環に刀身茎を挿入しており、獅噛環頭大刀や一部の旋回式単龍環頭大刀と構造的に全く同じではない。一部の例ではこれが抜けないように鉄製のクサビを打つものもあるとのことである。

（5）大谷晃二氏は、三累環頭大刀は獅噛環頭大刀と同様に原則として舶載品であると理解している（大谷2018）。一方で傘形・一体三累環、方形B類・C類三累環は日本列島で製作されたものとする意見（金2021）、6世紀後葉以降のものは日本製と考える意見（野垣2002）、6世紀後半以降のものが北部九州に集中することから、一部は西北九州で製作されたものとする意見（齊藤2017a）がある。

（6）獅噛三累環頭大刀の製作地などの検討については、型式学的観点からの検討だけでなく、材料面からの検討も不可欠であるとする指摘がある（成瀬2018）。このほか別の視点となるが、獅噛文帯金具を検討した山本孝文氏は獅噛文帯金具が正面観を文様として採用している点から環頭大刀など類似の文様を持つ同時期の遺物との関連性も視野に入れた総合的検討を行う必要を論じている（山本2014）。

（7）鉛同位体比による原料産地の分析・推定からも朝鮮半島産であることが指摘されている（馬淵1987）。また、近年、朝鮮半島産百済（グループGB）が原材料産出地として指摘されている（澤田2022）。

（8）これまでの整理と同様に時期設定は、Ⅰ段階（出雲3期・TK43型式期・6世紀後葉）、Ⅱ段階（出雲4期・TK209型式期・6世紀末～7世紀初頭）と設定する（大谷1999、松尾2005）。

（9）これまで岡田山1号墳例や古天神古墳例は倭風円頭大刀Ⅱ系列と位置づけられていた（大谷1999）。近年、再検討により、古天神古墳例は特異な製品としつつも、倭風円頭大刀Ⅰ系列と親縁性が強いことなどが指摘されている（大谷2018a）。

（10）TK23・47型式期に刃部幅4.0㎝の3d式の鉄刀が定型化し、その多くが全長100㎝以上の大型品で、以後6世紀後半まで大きな変化はおこらないことが指摘されている（齊藤2017b）。御崎山古墳出土鉄刀は茎尻の形状から2d式に位置づけられる。御崎山古墳出土鉄刀は全体の拵えなどに不明な点はあるが、刃部幅や想定される全長から倭系大刀と呼ぶにふさわしい。

（11）現在、装飾付大刀は畿内王権での一括生産・配布によるものと共通理解されている点から地域における連携を考えにくい資料ともいえる。しかし、倭系大刀が東西で共通して分布する点、東部では半島系環頭大刀が共伴する点などは決して対立構造を示すわけではなく、むしろ役割や職掌など王権から求められた性格の違いの反映と考える方が自然ではないだろうか。

## 引用参考文献

赤沼英男2018「八戸市丹後平古墳出土非鉄金属器の材質と製作技法―獅噛三累環頭大刀柄頭に視点をあてて―」『丹後平古墳群と蝦夷の世界』八戸市博物館

穴沢咏光・馬目順一1979「獅噛環刀試考」『信濃』31-4 信濃史学会

穴沢咏光・馬目順一1987「獅噛環刀試考（改稿版）」『日本考古学論集』8武器・馬具と城柵 吉川弘文館

穴沢咏光・馬目順一1985「出雲出土の獅噛環頭大刀」『八雲立つ風土記の丘』No.69、70合併号 島根県立八雲立つ風土記の丘

岩本崇2022「古墳時代研究における「東西出雲論」とその展望」『出雲・石見・隠岐の古墳文化』島根県立八雲立つ風土記の丘

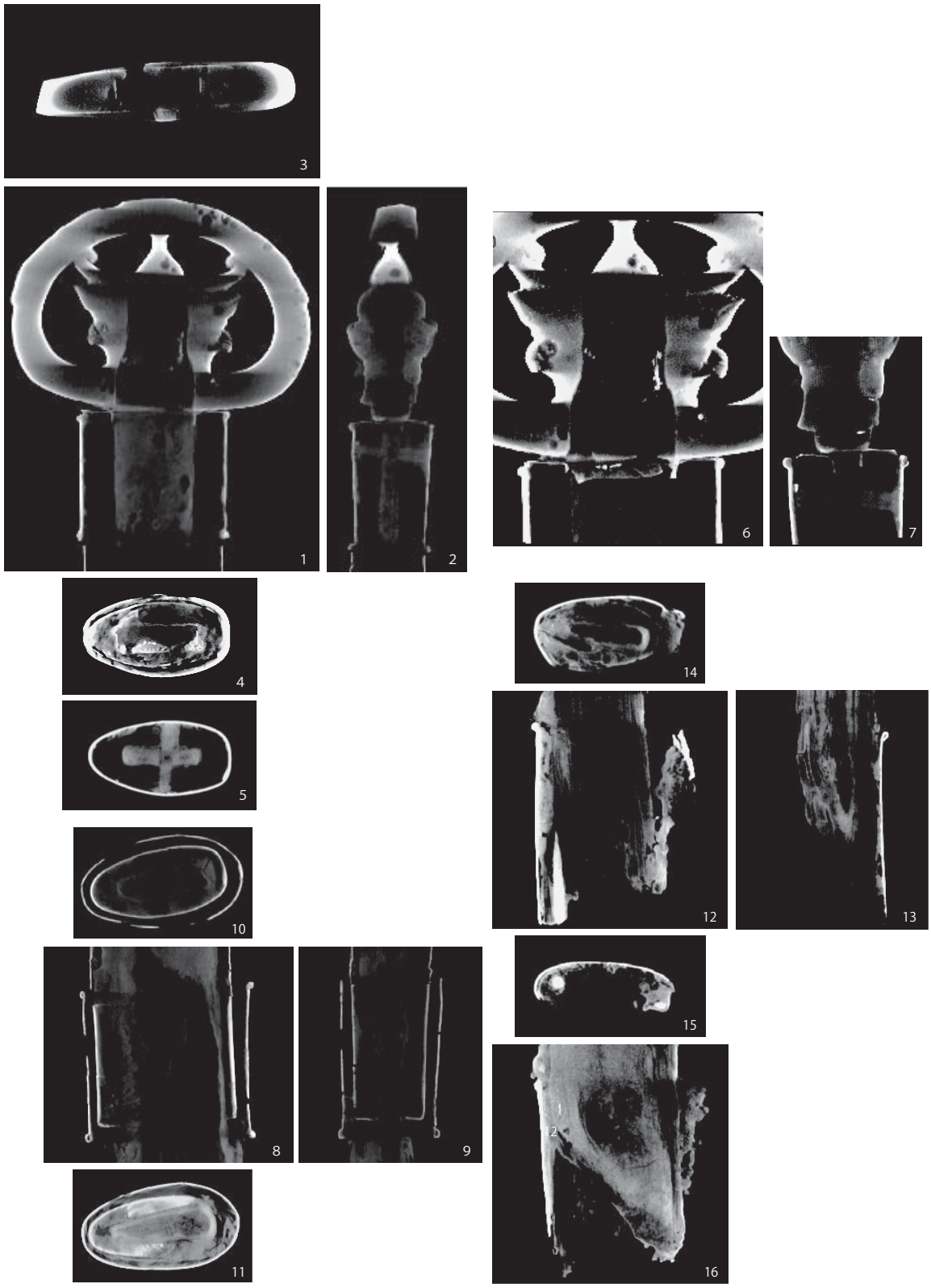
大谷晃二1994「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『島根考古学会誌』11 島根考古学会

大谷晃二1997「「出雲国」の成立―東部勢力の動向―」『古代出雲文化展』島根県教育委員会・朝日新聞社

大谷晃二1999「上塩冶築山古墳をめぐる諸問題」『上塩冶築山古墳の研究』島根県古代文化センター
大谷晃二2012「金鈴塚古墳の金銀装大刀はどこで作られたか？」『金鈴塚古墳展―甦る東国古墳文化の至宝―』木更津市郷土博物館金のすず
大谷晃二2015「金鈴塚古墳出土大刀の研究（１）単龍環頭大刀」『金鈴塚古墳研究』４ 木更津市郷土博物館金のすず
大谷晃二2016「御崎山古墳の獅噛環頭大刀」『八雲立つ風土記の丘』No.219 島根県立八雲立つ風土記の丘
大谷晃二2018a「古天神古墳出土大刀の時期と系譜」『古天神古墳の研究』島根大学法文学部考古学研究室・古天神古墳研究会
大谷晃二2018b「獅噛環頭大刀と金銀装大刀の製作と流通」『改めて出自をさぐる！獅噛三累環頭大刀柄頭』資料集 八戸市博物館
大谷晃二2020「石州府１号墳の金銅装頭椎大刀」『古墳と国家形成期の諸問題』山川出版社
大谷晃二（編）1996『御崎山古墳の研究』島根県教育委員会・島根県立八雲立つ風土記の丘
川西学（編）2018『福浦法田峠2号墳』松江市教育委員会・公益財団法人松江市スポーツ・文化振興財団
金宇大2019「旋回式単龍環頭大刀の新例とその評価」『文化財と技術』９ 特定非営利活動法人工芸文化研究所
金宇大2021「日本列島出土三累環頭大刀の系列とその性格」『考古学雑誌』104-1 日本考古学会
小谷地肇2000「獅噛式環頭大刀の分類」『青森県考古学会』12 青森県考古学会
齊藤大輔2017a「武装からみた善一田古墳群と６世紀の西北九州」『乙金地区遺跡群』23中巻 大野城市教育委員会
齊藤大輔2017b「古墳時代中期刀剣の編年」『中期古墳研究の現状と課題』Ⅰ中国四国前方後円墳研究会第20回研究集会（徳島大会）実行委員会
澤田秀実2022『日本列島における銅、鉛原材料の産出地同定と使用開始年代に関する学際的研究』くらしき作陽大学
白井久美子・山口典子2002『千葉県史編さん資料　千葉県古墳時代関係資料』第１分冊 千葉県
杉山秀宏2009「単龍環頭柄頭の終末例―太田市南金井出土例より―」『群馬県立歴史博物館紀要』30 群馬県立歴史博物館
成瀬正和2018「東アジアの古代黄銅関係品について」『改めて出自をさぐる！獅噛三累環頭大刀柄頭』資料集 八戸市博物館
八戸市教育委員会1990『丹後平古墳』
町田　章1976「環刀の系譜」『研究論集』Ⅲ 奈良国立文化財研究所
松尾充晶2001「装飾付大刀の評価と諸問題」『かわらけ谷横穴墓群の研究』島根県埋蔵文化財調査センター・島根県古代文化センター
松尾充晶2005「出雲地域の装飾付大刀と後期古墳」『装飾付大刀と後期古墳』島根県教育庁古代文化センター・島根県教育庁埋蔵文化財調査センター
松尾充晶2018「出雲の装飾付大刀からみた、古墳時代後期の地域首長と王権」『第４回古代歴史文化講演会 刀剣が語る古代国家誕生 資料集』古代歴史文化協議会
馬淵久夫1987「鉛同位体比による原料産地推定」『出雲岡田山古墳』島根県教育委員会
持田大輔2016「獅噛環頭大刀」『金鈴塚古墳研究』４ 木更津市郷土博物館金のすず
山本孝文2014「初源期獅噛文帯金具にみる製作技術と文様の系統―長野県須坂市八丁鎧塚２号墳の帯金具から―」『日本考古学』38 日本考古学協会
山本忠尚1979「舌出し獣面考」『研究論集』Ⅴ 奈良国立文化財研究所
吉松優希2021「装飾付大刀からみた東西出雲論の現状と展望」『出雲・石見・隠岐の古墳文化』島根県立八雲立つ風土記の丘

## 図版出典

第１図　筆者作成、第２図　筆者作成、第３図　大谷（編）1996より、第４図　筆者作成（島根県教育委員会蔵、島根県立八雲立つ風土記の丘保管）、第５図１　大谷2015より、２・３　金2019より、４・５　白井・山口（編）2002より、７　大谷2016より、８　八戸市教育委員会1990より、第６図　大谷1999・大谷2020 をもとに筆者作成、第７図１・２　大谷（編）1996より、３・４　島根大学法文学部考古学研究室・古天神古墳研究会『古天神古墳の研究』より、５～７　島根県教育委員会1987『出雲岡田山古墳』より、第８図　松尾2018 をもとに筆者作成、図版　筆者作成（X線CTは九州歴史資料館撮影、島根県教育委員会蔵、島根県立八雲立つ風土記の丘保管）




１柄頭正面　２柄頭正面　３柄頭（先端側）　４柄頭筒金具（柄頭側）　５柄頭筒金具断面　６柄頭正面（部分拡大）
７柄頭側面（部分拡大）　８鞘口金具正面　９鞘口金具側面　10 鞘口金具断面　11 鞘口金具断面（切先側）
12 鞘尻金具正面（蟹目釘）　13 鞘尻金具側面　14 鞘尻金具（茎側）　15 鞘尻金具（鞘尻側）　16 鞘尻金具正面

**図版　御崎山古墳出土獅噛環頭大刀X 線CT 画像**